

# アタヤル語群の「星」に見られる様々な派生形

落合 いずみ（帯広畜産大学）<sup>†</sup>

## Various derivatives of “star” in Atayalic languages

Izumi OCHIAI (Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine)

### 要旨

アタヤル語群祖語における「星」は、アタヤル語スコレック方言の *biñah* とセデック語トゥルク方言の *pəñə<ra>h*（セデック祖語 *\*pəñərah*）を比較すると *\*biñəh* と再建されうる。セデック語では化石後方接中辞の *<ra>* が挿入された。しかしアタヤル語ではその他の方言において *beyañah*, *hayañah*, *bəliyaquh*, *hañitux* など様々な形式が報告されている。これらの形式もアタヤル語群祖語 *\*biñəh* に由来するものであるが、それぞれの形式において以下のような形態的、または音韻的变化を経ている—化石前方接中辞 *<ət>* の挿入、化石後方接中辞 *<ya>* の挿入（アタヤル語群祖語 *\*<ra>* に遡る）とそれに付随する音位転換、化石接尾辞 *-tux* や *-quh* の付加とそれに先立つ語尾の脱落、語頭子音の変化 *b>h*、語中子音の変化 *ŋ>y* など。以上の変化がアタヤル語諸集落において生じたが、どの変化がどの集落に生じたかに違いが見られ、そのことが形式の多様性を生じさせている。そのため形式間の同源語としての関連性が見えにくくなっている。（既発表の有無：未発表）

### 1. はじめに<sup>1</sup>

アタヤル語群はオーストロネシア祖語から第一分岐する一語群である（Blust 1999）。アタヤル語群にはアタヤル語とセデック語の二つの言語が含まれる。これらは台湾北部から中部にかけて話される台湾先住民の言語である（図 1）。アタヤル語はスコレック方言とツォレ方言の二つの方言に大別され、セデック語はパラン方言とトゥルク方言の二つの方言に大別される<sup>2</sup>。台湾先住民の言語はすべてオーストロネシア語族に属するが、これらのうちアタヤル語群に隣接している言語としてサイシヤット語（Saisiyat）とブヌン語（Bunun）などが挙げられる。

<sup>†</sup> i.ochiai@obihiro.ac.jp

<sup>1</sup> 音素目録筆者の調査によるとアタヤル語スコレック方言の音素目録は母音が /aiuəeo/、子音が /p b t k g qʔ s x h r l m n ŋ y w/ である。b は [β]、g は [ɣ]、r は [ɾ] である。r は母音 i の前では [z] で現れる。Huang (1995: 16–17) によるとアタヤル語ツォレ方言（Rinax 集落）では母音に /ə/ が無く、子音に /ʈ/ が加わる。また、セデック語パラン方言の音素目録は筆者の調査によると、母音が /a e i u o/、二重母音は /uy/ のみ、子音が /p b t d ʈ k g q s x h m n ŋ l r w/ である。r は [ɾ] に、y は [j] に相当する。月田 (2009: 56–62) によるとトゥルク方言の母音は単母音が /aiuəi/、二重母音が /away uy/ であり、子音は /ʈ/ が無い以外はパラン方言と同じである。また、月田によるとトゥルク方言において l は [ʎ]、g は [ɣ] に相当する。

<sup>2</sup> これらの方言区分は小川・浅井 (1935: 21, 399) を参考にしている。

本稿はアタヤル語群において「星」を表す形式について扱う。ちなみに、オーストロネシア祖語において「星」を表す形式は Blust and Trussel (2010) によって \*bituqen と再建されている<sup>3</sup>。アタヤル語群祖語において本稿が再建する「星」はこのオーストロネシア祖語の形式とは同源ではない<sup>4</sup>。

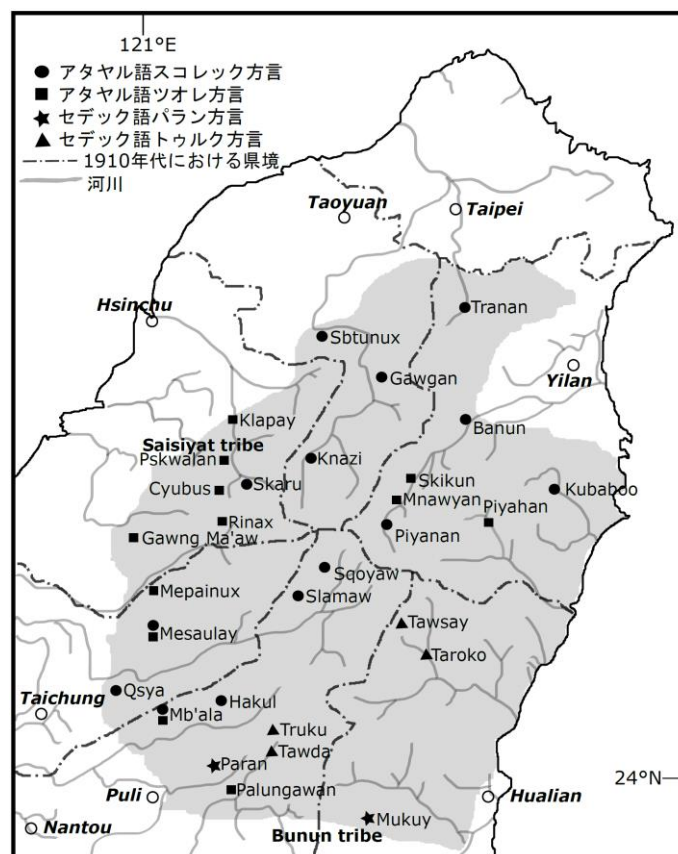


図1 アタヤル語群の分布

セデック語の二つの方言において「星」を表す形式は同源語としての明らかな統一性が見られるため、セデック祖語の形式を再建することは容易である。アタヤル語において「星」を表す形式は実に様々なものが佐山 (1983a, b) に報告されており (ただし初出はそれぞれ 1918, 1920 年)、それらの間に同源の関係が成立するのかが不明瞭である。その中でも特にセデック語の形式に類似していると考えられるものがあるため、2 節ではその形式を基にアタヤル祖語を再建し、その上でアタヤル語群祖語を再建する。そして 3 節では、アタヤル語群祖語を基にし、アタヤル語において見られる様々な「星」の形式がどのような変化を経て生じたかについて考察し、4 節でまとめる。

<sup>3</sup> 例えば、Blust and Trussel (2010) において「星」を表すサイシヤット語の形式は *bintæʔæn* であり、原住民族語言研究發展基金會 (2020) によるとブヌン語 (タキトゥドゥ方言) の形式は *bintuqan* である。

<sup>4</sup> アタヤル語群祖語は \*biŋəh と再建されうるが、この形式は第一音節の \*bi がオーストロネシア祖語の形式 \*bituqen の第一音節 \*bi と同じである点が偶然かもしれないが気になる。

## 2. アタヤル語群祖語における「星」の再建と化石接辞

まず 2.1 節ではセデック語諸方言における「星」の形式を比較し、セデック祖語を再建する。その上でセデック祖語とアタヤル語スコレック方言の「星」の形式を比較し、セデック祖語に化石接中辞が付加されているとの分析のもと、アタヤル語群祖語を再建する。

次に 2.2 節ではアタヤル語群において化石接辞の付加した語彙の例を挙げ、化石接辞の付加が語彙の擬装化の役割を果たすことを示唆する。そして、アタヤル語群では「星」の他にも天体を表す語である「月」「太陽」にも化石接辞が付加することを見る。

### 2.1. アタヤル語群祖語における「星」の再建

セデック語パラン方言において「星」を表す形式は *puŋerah* であり、セデック語トゥルク方言においては *pəŋərah* である。両者は同源形式であり、セデック祖語は *\*pəŋərah* と再建されうる<sup>5</sup>。

アタヤル語スコレック方言の形式は小川 (1931: 345) によると *biŋah* である。本稿はこれを、上記のセデック祖語 *\*pəŋərah* との同源形式であると考え。ただし、分節音が規則的な一致を示さない箇所も見られる。語頭子音についていえば、アタヤル語で *b* であるのに対し、セデック祖語では *\*p* である。これはセデック祖語の側で *b* が突発的に無声音化して、*p* に変化したのではないかと考えられる。なぜなら、アタヤル語群祖語において *\*b* である子音がセデック祖語において突発的に *p* に変わる以下のような類例が見られるからである。

例えば「衣服を洗う」を表す語アタヤル語スコレック方言では *bahuq* であり、セデック語パラン方言では *pahu* である。セデック語パラン方言で命令の接尾辞 *-i* の付いた形式は *pehe-i* 「衣服を洗え」であり、語末母音である *u* が接尾辞付加後に *e* に変わる。接尾辞の付いた後に現れる母音が古い母音を示す。そしてこの *e* はセデック語パラン方言では *a* に遡るため、語根は *pahə* であったことがわかる。アタヤル語群祖語における形式の語頭子音については、アタヤル語の形式に現れる *b* かセデック語の形式に現れる *p* か判断しかねるが、Blust and Trussel (2010) において、オーストロネシア祖語の「衣服を洗う」が *\*basəq* であることから、*b* であったと判断できる。そのため、アタヤル語 *bahuq* とセデック語のより古い語根 *pahə* から再建されるアタヤル語群祖語は *\*bahəq* となる。セデック祖語は *\*pahə* と再建できるが（語末子音の *\*q* が脱落した）、この形式において語頭の *b* が突発的に *p* に変わった<sup>6</sup>。

語頭子音は *\*b* と再建されることがわかったが、アタヤル語の *biŋah* とセデック祖語の *\*pəŋərah* ではそもそも音節数が異なる。両言語において典型的な語は二音節から構成されるため、アタヤル語群祖語の形式により近いと考えられるのはアタヤル語の形式である。アタヤル語の形式から見ると、セデック祖語の形式において、余分な分節音は子音 *r* とその隣接母音 *-ər* または *ra-* と考えられる。

<sup>5</sup> セデック語パラン方言の形式は著者のフィールド調査により、セデック語トゥルク方言の形式は Rakaw (2006: 522) による。セデック語パラン方言において次末音節の *a* は *e* に変化した。それより前の音節の *a* は *u* に変化した。

<sup>6</sup> また、アタヤル語群祖語において「親の親」を表す語は *\*baki* と再建されるが、セデック祖語ではこれが *baki* 「祖父」と *pai* 「祖母」に分かれる (Ochiai 2023: 79)。これは、*pai* 「祖母」において *baki* 「祖父」との意味・形式の区別をするために語頭の *b* の無声化が意図的に起きたと思われる例である。

そこで、セデック語の形式の余分な一音節の可能性として考えられるのが、化石後方接中辞の挿入である。落合（2022a）は、アタヤル語群祖語において特殊な接中辞である、化石後方接中辞が見られ、その形式は\*⟨ra⟩と再建される。その挿入位置は最終音節の母音の直後であるとする。セデック祖語の形式がこの化石後方接中辞を含むとすれば\*pəŋə⟨ra⟩h と分節される。そうするとセデック祖語の語根は暫定的に\*pəŋəh となる。ただし、この形式の次末音節の母音については、化石後方接中辞が付加し\*pəŋə⟨ra⟩h となると、前次末音節へと移動する。セデック語では前次末音節は母音の弱化を受ける音節であり、この弱化の影響で本来別の母音であったものが弱化母音としての ə に変わった可能性が高い。

アタヤル語 *biŋah* とセデック祖語の暫定的語根は\*pəŋəh を比べて、分節音が一致しないのは次末音節と語末音節の母音である。次末音節はアタヤル語の形式で *i* である。この音節は母音弱化を被らない。一方セデック祖語の暫定的語根における次末音節は、化石後方接中辞が付加し、前次末に移った後の形式を基にしたものである。前次末に移った後では母音弱化が起きるので、曖昧母音で現れることが予測される。そのため、アタヤル語の形式が次末音節の母音を保存していると考えられる。セデック祖語の次末音節も本来は母音 *i* を持っていたと考えられ、セデック祖語の語根は\*piŋəh と書き換えられる。

次に語末母音についてであるが、セデック語のデータを基にすれば\*ə と再建される。セデック語では化石後方接中辞の付加後にこの母音が次末音節に移動しても\*ə で現れる<sup>7</sup>。セデック祖語が語末母音を保存しているとすれば、アタヤル語では ə から *a* に変わったと考えられ、アタヤル祖語として\*biŋəh という形式が再建されそうである。ただし、語末音節における母音 ə はアタヤル語においては *u* に変化するとされるため（Huang 2018: 271–274）、期待される形式は\*\*biŋuh である。これに反し、得られる形式は\*biŋəh であることから、語末母音 ə が例外的に *a* に変化し、*biŋah* を得たことになる<sup>8</sup>。表 1 にアタヤル語群祖語における「星」の再建に関わる形式を挙げる。

	祖形
アタヤル祖語	*biŋəh
セデック祖語	*piŋəh > *pəŋə⟨ra⟩h
アタヤル語群祖語	*biŋəh

表 1 アタヤル語群祖語における「星」の再建

## 2.2. アタヤル語群祖語における化石接辞

前節ですで見えた化石接辞について再度略述する。Li（1985: 258–259）ではアタヤル語群において機能不明の接中辞、接尾辞が付加することが述べられている。これらは接中辞と接尾辞に分けられ、落合（2022a）は化石接辞と呼ぶ。接中辞の場合は化石前方接中辞、化石中央接中辞、化石後方接中辞の 3 種類に分けられる。これら化石接辞が付いたアタヤル語群

<sup>7</sup> セデック語において、最終音節における母音は ə から *u* への歴史的変化を経たが、接辞の付加によりこの母音が次末音節に移った場合、本来の ə（パラン方言なら *e*）で現れる（脚注 19 参照）。そのため、次末音節に移った際に現れる母音が歴史的により古い母音を示すことがわかる（Ochiai 2018）。

<sup>8</sup> 例外的に *a* に変化したのは、この母音の直後の子音 *h* が影響しているかもしれない。子音 *h* は、母音 *u* よりも調音位置がより低い *a* との親和性が高かったのかもしれない。

の語彙を扱った文献として、「サトウキビ」と化石中央接中辞（落合 2022b）、「家」と化石接尾辞（落合 2021）、「年上キョウダイ」と化石後方接中辞（落合 2022c）、「下り」と化石後方接中辞（落合 2020b）、「上り」と化石接尾辞（落合 2020b）、「アタル」と化石接尾辞（Ochiai 2019）、「話す」と化石接尾辞（落合 2022d）、「肩」と化石後方接中辞・化石接尾辞（落合 2020a）、「寒い」と化石後方接中辞・化石接尾辞（落合 2023）などが挙げられる。これら文献を通して、化石接辞の付加は形式を擬装し、本来の形式をわかりにくくする手段として捉えられている<sup>9</sup>。

セデック祖語において「星」に起きた化石後方接中辞の付加も、擬装として捉えられるだろう。アタル語群では「星」の他にも天体を表す語に化石接辞が付加する。例えば、アタル語では天体を表す語「太陽」と「月」に化石接尾辞が付加することが知られている。Li（1981: 294）によるとアタル語群祖語において「太陽」を表す形式は\*wagi と再建されているが、アタル語ツオレ方言（Maspaizi?集落）では wagi-tux というように接尾辞-tux を付加する。しかもこの接尾辞は「星」に付加した接尾辞のうち一つの-tux（例えば表 2 の Skikun 集落の形式 hiŋa-tux）と同一形態である。

さらに、オーストロネシア祖語において「月」を表す語は\*bulaN と再建されており（Blust and Trussel 2010）、アタル語群祖語における反映形は Li（1981: 288）によって\*bural と再建されている。しかし、Li（1981: 288）の収集したアタル集落からの形式では、\*bural を直接反映した形式は見られず、主に化石接尾辞-teiŋ を付加した形式で現れる。例えばスコレック方言では baya-teiŋ という形式になる。この化石接尾辞が付加する際、語根の語末子音\*l（オーストロネシア祖形\*bulaN における\*N）は削除されている。

前節で見たように、セデック祖語の「星」では化石後方接中辞が挿入されているが、次節で見るようにアタル語における様々な「星」の形式では、化石前方接中辞、化石後方接中辞、化石接尾辞が付加したものが見られる。

### 3. アタル語における様々な「星」の形式

表 2 は佐山（1983a, b）に記載されたアタル語方言における「星」の形式を示す。左から二列目には集落名を示した。その左にはそれぞれの集落で話される方言区分を示す。上から順にスコレック方言（S）、スコレック方言とツオレ方言の混在した地域（S/C）、ツオレ方言（C）を示す<sup>10</sup>。その右隣には佐山（1983a, b）における表記を挙げた。これらはカタカナで表記されている。これらカタカナ表記に対し本稿筆者が音韻的解釈を加え、表記し直したのがその右の列である<sup>11</sup>。最右列には音変化や形態的变化が生じた語に対し、変化の種類を記号で示した。A は語頭子音の変化（3.1 節）、B は化石前方接中辞の付加（3.2 節）、C は化石接尾辞の付加（3.3 節）、D は化石後方接尾辞の付加、E は音位転換（3.4 節）、F は前次末

<sup>9</sup> 化石前方接中辞については、オーストロネシア語族全般に見られるものであり、アタル語群のみに特徴的な接辞ではない（3.2 節）。また化石前方接中辞の付加は、他の化石接辞に比べ、形態を大きく変えるものではない。そのため、化石前方接中辞については形式の擬装的効果をもたらすものではないと考える。

<sup>10</sup> これら方言区分については移川他（1935: 21-95、付録）を参照した。

<sup>11</sup> 音韻的解釈を加えた表記は、本稿筆者が佐山（1983a, b）のカタカナ表記から最適の表記を推し量った結果を示したものである。本稿の考察は表 2 で示した音韻的解釈に基づいてなされている。中には本稿の分析による分節音が本来の意図とは、多少異なる場合もあるかもしれない。その点は今後の課題とする。

音節の脱落（3.3 節と 3.4 節）、G は語中子音の変化（3.3 節）を示す。

方言	集落名 <sup>12</sup>	表記	音韻的解釈	変化
S	Sbutunux	ベンガハ	<i>biŋah</i>	
S	Skaru	ベンガハ	<i>biŋah</i>	
S	Gawgan	ビンガハ	<i>biŋah</i>	
S	Qsya <sup>13</sup>	ビンガハ	<i>biŋah</i>	
S	Slamaw	ビンガハ	<i>biŋah</i>	
S	Hakul	ビンガフ	<i>biŋah</i>	
S	Tranan	ビンガハ	<i>biŋah</i>	
S	Kubaboo	ビンガ	<i>biŋah</i>	
S	Pyanan	ヒンガハ	<i>hiŋah</i>	A
S	Banun	ヒンガ	<i>hiŋah</i>	A
S	Sqoyaw	ギューット <sup>14</sup>	<i>ŋi-tux</i>	C・F
S/C	Mesaulay	ジンガフ、 ビンガフ	<i>ɕiŋah</i> (?), <i>biŋah</i>	A
S/C	Mb'ala	ベヤンガハ	<i>bəyaŋah</i>	D・E
C	Klapay	ベンガハ	<i>biŋah</i>	
C	Pskwalan	ベンガハ	<i>biŋah</i>	
C	Pyahan	ビンガ	<i>biŋah</i>	
C	Knazi	ビリンカハ	<i>b&lt;əl&gt;iŋah</i>	B
C	Skikun	ヒゲトフ	<i>hiŋi-tux</i>	A・C
C	Mnawyan	ヒゲトフ	<i>hiŋi-tux</i>	A・C
C	Pelungawan	ハギットフ	<i>haŋi-tux</i>	A・C
C	Mepainux	ヤンガッハ	<i>yaŋah</i>	D・E・F
C	Gawng Maaw	ハヤガー	<i>hayəŋah</i>	A・D・E
C	Rinax	ハヤガ、 プリアコ	<i>hayəŋah</i> , <i>b&lt;əl&gt;iya-qu</i>	A・D・E B・C・G
C	Cyubus	ベリヤコフ	<i>b&lt;əl&gt;iya-quh</i>	B・C・G

表 2 アタヤル語における様々な「星」の形式<sup>15</sup>

<sup>12</sup> 佐山（1983a, b）における集落名の表記は表 1 の上から順に以下である。大料崁、舎加路、合歛、南阿冷、沙拉茅、白狗、屈尺、南灣（クバボー社）、南灣（ピヤナン社）、南灣（バヌン社）、司加耶武、南勢、眉原、加拉歹、巴思誇蘭、南灣（ピヤハン社）、崙拿餌、南灣（シキクン社）、南灣（マナウヤン社）、万大、北勢、大湖、汶水、鹿場。

<sup>13</sup> 落合（2023: 190）において South Qsya と表記した集落と同一である。落合（2023: 191）の地図では Qsya と表記している。ただし地図上ではツオレ方言との表示であるが、これは誤りでスコレック方言に糺される。

<sup>14</sup> 化石接尾辞-*tux* の付加した他の形式を参照し、音韻的解釈を *ŋi-tux* と表したが、カタカナ表記では語末子音の *x* に相当する部分は現れていない。語末子音の *x* は脱落していた可能性がある。

<sup>15</sup> 李（1996: 202）は宜蘭方面におけるアタヤル語諸方言の「星」の形式を挙げている。その中に化石接尾辞-*tuh* が付加した形式が、Skikun 集落、Mnawyan 集落、Lmuan 集落の形式に見られ、それぞれ *kəŋituh*, *həŋituh*,

### 3.1. 語頭子音の変化

表 2 には語頭子音 *b* が変化した形式がいくつかの集落 (Pyanan, Banun, Mesaulay, Skikun, Mnawyan, Pelungawan, Gawng Maaw, Rinax) において見られる。表右端の変化の種類として A で記しているものである。それらは Mesaulay 集落の一例を除きすべて *b* が *h* に変化している。また、Mesaulay 集落と Rinax 集落からはそれぞれ二つの形式が挙げられているが、それらのうち、上の形式が語頭子音の変化を経ている一方、下の形式は *b* が保たれている。

Mesaulay 集落の形式「ジンガフ」に対して、本稿では語頭子音を破擦音の *ɬ* と推定したが、これは *b* から *h* に変わる間に起きた子音の変化の中間的段階を示したものかもしれない。

アタヤル語群における子音 *b* と *h* に関わる類例は、落合 (2023: 193–195) にも挙げられている。そこではアタヤル語群祖語において「山の裏側」を表す語を \*Ribaq または \*Rihag と再建している。語中子音として \**b* が再建されるべきか、\**h* が再建されるべきかその時点ではわからなかった。セデック語のデータは \**b* を支持し、アタヤル語のデータは \**h* を支持したからである。上記の「星」のデータがアタヤル語のいくつか下位方言において *b* から *h* へと変化したことを合わせて考えれば、「山の裏側」は \*Ribaq と再建され、アタヤル語において語中子音が *h* に変わったと見なせる<sup>16</sup>。

「星」における語頭子音の変化について、方言別に考えてみると Pyanan と Banun はスコレック方言の集落である。Skikun, Mnawyan, Pelungawan, Gawng Maaw, Rinax はツオレ方言の集落であり、Mesaulay は両方言の混合集落である。この音変化は両方言にまたがってみられる音変化のようだが、どちらかといえばツオレ方言に多く見られるようである。

### 3.2. 化石前方接中辞 <əl>

Knazi 集落の形式である *b<əl>iqah* を語根 *biqah* と比べると、Knazi 集落の形式では語頭子

---

*kəjituh* である (表 2 に Lmuan 集落のデータは見られない)。李 (1996: 202) では、これら形式の前次末音節の母音は表記されていないが、本稿筆者が曖昧母音を補った。さらに、李 (1996) では化石接尾辞は *-tux* ではなく、*-tuh-* である。これは Pelungawan 集落の形式がそうであるように、もともと *-tux* であったと考える。しかも 3.3 節で述べるように、同一形式の化石接尾辞が付加した *ya-tux* 「上り」という類例もアタヤル語に見られる。Skikun 集落、Mnawyan 集落、Lmuan 集落では接尾辞 *x* が *h* に変わったのだろう。

そして、李 (1996: 202) による Skikun 集落、Mnawyan 集落、Lmuan 集落の「星」の形式では前次末音節母音がすべて *i* で表記されている。そのため表 2 の音韻的解釈においても、Skikun 集落と Mnawyan 集落の形式の前次末音節母音は *i* に相当すると推定した。

また、佐山 (1983a: 388) における Skikun 集落の形式は語頭子音が *h* であるが、李 (1996: 22) では *k* である。このことから、語頭子音が *h* (これは本来 *b* であった) から *k* に変化したことがわかる。そして同様の变化は Skikun 集落の隣村の Lmuan 集落でも起こったことがわかる。Lmuan 集落は李 (1996: 196) によるとスコレック方言に属するので、語頭子音 *h* から *k* への変化はどちらかの方言に偏った変化でないこともわかる。

<sup>16</sup> アタヤル語の子音 *b* の音価が摩擦音 [β] であることから、同じく摩擦音である *h* への変化は理解に難くない。

音 *b* の後ろに、余分な分節音である *al* が含まれる。これは化石接中辞と考えられる。オーストロネシア諸語全般に語頭子音の直後に挿入される接中辞が見られるが (Blust 2013: 389–392)、落合 (2022a: 10–11) では、アタヤル語群においてこの位置に挿入される接中辞を化石前方接中辞と呼び、アタヤル祖語における化石前方接中辞の一つを \**<al>* と再建している<sup>17</sup>。Knazi 集落の形式に見られる *al* は、この化石前方接中辞を反映したものと考えられる。同一の化石前方接中辞の挿入は、Knazi 集落の形式のほかにも Rinax 集落の二形式のうちの下形式と Cyubus 集落の形式に見られる。表中の変化の種類では B で示されている。この化石前方接中辞の挿入された形式が見られたのは、ツオレ方言の集落に限られている。

### 3.3. 化石接尾辞-tux または-quh

表 2 では化石接尾辞を記号 C で示す。化石接尾辞が付加した類例を挙げる。落合 (2020b) はアタヤル語で「上り」を意味する *yatux* は、*ya-tux* と分析され、語根はアタヤル語群祖語 \**daya* (アタヤル語では *raya* と反映されることが期待される) であり、これに対し化石接尾辞-tux が付加し一旦 *raya-tux* となったが、前次末音節が脱落して、*ya-tux* となったと述べる。前次末音節の脱落が起きやすいのは、次末音節より前の音節はアクセントが置かれられない音節だからである<sup>18</sup>。表 2 においても前次末音節が脱落した形式が見られるが (Sqoyaw 集落と Mepainux 集落)、このような音節脱落を持つ場合、右列に記号 F で示した。

前述の例と同一形態の化石接尾辞-tux が付加したと考えられる形式が見られるのが、表 2 の中の Skikun、Mnawyan、Pelungawan 集落であり、それぞれ *hiji-tux*、*hiji-tux*、*haji-tux* である。これら集落の形式からわかるのは、語根 *biñah* の語末子音の *h* が脱落した形式である *biñə* に対して、化石接尾辞の-tux が付加し、*biñə-tux* となったのちに、語頭子音の *b* が *h* に変わったこと、そして次末音節の母音である *a* が *i* に変わっただろうことである。ただし、次末音節母音の *a* から *i* への変化はやや唐突に思われる。

もしかしたらアタヤル語群祖語 \**biñəh* における次末母音の *a* を保ったまま、語末子音を脱落させた \**biñə* に化石接尾辞の-tux が付加され、*biñə-tux* が生じたのかもしれない (ここからさらに *hijiə-tux* に変わる)。この場合、最終音節における歴史的な曖昧母音 \**ə* が、接尾辞の付加によって次末音節に移動した場合に出現する<sup>19</sup>。そして、この次末音節の曖昧母音 *ə* が *i* に変化し、*hiji-tux* になったと見られる。この変化は曖昧母音 *ə* の直前の音節において母音が *i* であることが影響し、その同化を受けた可能性がある。また、Pelungawan 集落の形式 *haji-tux* では前次末音節の母音が *a* に変わる。Huang (2018: 273) に述べられるように、ツオレ方言の下位方言 (Maybalay 集落) では前次末音節より前の音節の母音は弱化母音となるが *a* で現れる。このような音韻的傾向が Pelungawan 集落でも見られるのかもしれない。

<sup>17</sup> ただし、化石前方接中辞の機能については不明である。

<sup>18</sup> 小川・浅井 (1935: 22) によるとアタヤル語のアクセントは、主に次末音節に置かれるとする (最終音節にアクセントが移る場合もあるが、その条件は次末音節が曖昧母音である、最終音節の母音が長母音である、最終音節のコードに声門閉鎖音を有することである)。

<sup>19</sup> 同様の事例は落合 (2022a: 17–19) にもセデック語パラシ方言において報告されている。「家の外」を表す語には *ɲaɲuc* と *ɲe<ra>c* があるが、後者は前者に対し化石後方接中辞 <*ra*> が、最終音節母音 *u* の直後に挿入されて派生されたものである。最終音節母音 *u* が次末音節に移動した場合、歴史的曖昧母音 (ただし、曖昧母音 *ə* は *e* へ変化する) で出現する。期待される形式は *ɲaɲe<ra>c* だが、前次末音節が脱落する。



そのため *haji-tux* に変わったのだろう。

次末音節における曖昧母音 *a* から母音 *i* への変化はおそらく *Sqoyaw* 集落の形式でも起きている。しかも、*Sqoyaw* 集落の形式では前次末音節の脱落も起き、*hiji-tux* から *ɲi-tux* になったと考えられる。この化石接尾辞-*tux* 付加したが形式を持つ集落は、*Sqoyaw* 集落がスコレック方言であることを除けばすべてツオレ方言である<sup>20</sup>。

ここまで化石接尾辞の-*tux* について述べたが、これとは異なる形式の化石接尾辞-*quh* が付加したと考えられるのが、*Cyubux* 集落の形式 *b<əl>iya-quh* である<sup>21</sup>。これは、語根 *biŋah* の語末子音の *h* が脱落した形式である *biŋa* に対して、化石前方接中辞<*əl*>が挿入され（3.2 節）、*b<əl>iŋa* になったものに対し、化石接尾辞-*quh* が付加したものでしょう<sup>22</sup>。ここから予測される形式は *b<əl>iŋa-quh* であるが、実際の形式は *b<əl>iya-quh* であるから、語根の語中子音である *ŋ* が *y* に替わっている。この子音の変化はアタヤル語において規則的に見られるものではないため、突発的に起きた音変化と見なせる。表 2 では記号 G でこの語中子音の変化を示す。しかもこの形式にはここから化石接尾辞の接尾辞末の子音 *h* が脱落した形式が、*Rinax* 集落の二つある形式の中の下の形式、*b<əl>iya-qu* である。この化石接尾辞-*quh* が付加した集落はどちらもツオレ方言に属する。このことから、*Sqoyaw* 集落を除き、化石接尾辞（形式が-*tux* であるか-*quh* であるかに拘わらず）が付加したのはツオレ方言の集落に限られる。

### 3.4. 化石後方接中辞<*ya*>と音位転換

2 節で述べたようにセデック祖語において「星」を表す語には化石後方接中辞<*ra*>の挿入が起きた。表 1 に示したようにセデック祖語において *\*piŋəh* から *\*pəŋə<ra>h* へと変化した。

この化石後方接中辞はアタヤル語群祖語の *\*<ra>* に遡り、アタヤル語では<*ya*>で反映される<sup>23</sup>。表 2 ではこの化石後方接中辞<*ya*>が挿入された形式がいくつか見られる。表中では記号 D でこの変化を示す。

まず表 2 において *Mb'ala* 集落の形式である *bə<ya>ŋah* に注目したい。落合（2022a）によ

---

<sup>20</sup> 化石接尾辞の付加はツオレ方言に特有のものに思われる。そのためスコレック方言に属する *Sqoyaw* 集落においてなぜ化石接尾辞付加の変化を経たのかは不明である。

<sup>21</sup> *Rinax* 集落の形式と *Cyubus* 集落の形式のカタカナ表記「ブリヤコ」と「ベリヤコフ」において化石接尾辞に当たる部分は「コ」または「コフ」であるが、この表記からは初頭子音が *k* か *q* か判断できない。ただし、原住民族語言研究發展基金會（2020）における *Rinax* 集落の形式は *buliqu*（語末には声門閉鎖音を表す記号のアポストロフィも付加されているが、音声的に付随するものである可能性が高いため本稿では記さない）であるため、*q* であると判断した。また、本稿では接尾辞末の子音は、その脱落のしやすさから推して *h* であると考えたが、*x* である可能性も排除できない。さらに、原住民族語言研究發展基金會（2020）における *Rinax* 集落の形式は *buliqu* である。これについて、表 2 の *b<əl>iya-qu* から語中の *ya* が脱落していることがわかる。4 音節語としての *b<əl>iya-qu* は語としては長すぎるので短くする作用が働いたための脱落であろうか（語中での CV の脱落は管見の限りこの他に例がない）。また、化石前方接中辞<*əl*>の母音が *a* から *u* に変化している。

<sup>22</sup> これらは *biŋa* という語末母音 *a* を持つ形式に化石接尾辞が付加したと考えたが、他の例が示唆するように *biŋa* に付加したのかもしれない。その場合は曖昧母音の *a* への変化について説明が必要になる。

<sup>23</sup> Li（1981: 264）によるとアタヤル語群祖語の *\*r* がアタヤル語の多くの下位方言で *y* に変わる。

ると化石後方接中辞の挿入される位置は最終音節母音の直後であるため、語根 *bəŋah* に対して化石後方接中辞の<ya>が挿入されたならば、形式は *bəŋa<ya>h* となるはずである。ところが実際の形式 *bə<ya>ŋah* では化石後方接中辞が期待される位置よりも前の音節に現れている。ここで考えられるのが音位転換の可能性である。本来は、セデック祖語の \**pəŋə<ra>h* と並行的に、アタヤル語のいくつかの下位方言においても *bəŋa<ya>h* が生じたと考えられる。その後で子音 *y* とその直前の音節に含まれる子音 *ŋ* が転換し、*bəyŋah* に変わったのだろう。表 2 では化石後方接中辞に関わる音位転換を記号 E で示す。

同様の化石後方接中辞と音位転換による形態音韻的变化は Gawng Maaw 集落と Rinax 集落（二つあるうちの上の形式）でも起きた。これらの形式ではさらに語頭子音の *b* から *h* への変化も起き、*hayŋah* となっている。3.3 節でも述べたように前次末音節の母音が *a* ではなく *a* で現れるのは、ツオレ方言に生じる傾向にある特徴である。Mepainux 集落も同様の化石後方接中辞と音位転換による形態音韻的变化が起きたが、さらに前次末音節の脱落も伴い、*bə<ya>ŋah* から<ya>ŋah に変化したのだろう。

表 2 からわかるように、化石後方接中辞<ya>の挿入が起きた形式のすべてにおいて、化石後方接中辞とその直前の音配列との音位転換が伴っている（記号 D と E は対になっている）。

方言について見ると、化石後方接中辞の挿入と音位転換が起きたのは、Pelungawan、Mepainux、Gawng Maaw、Rinax 集落であるから、ツオレ方言であることがわかる。Mb'ala 集落においても同様の变化が起きているが、この集落はスコレック方言とツオレ方言の混在集落である。

ちなみに、化石後方接中辞に関わる音位転換が起きた例は、セデック語トゥルク方言にも見られる。原住民族語言研究發展基金會（2020）にはセデック語トゥルク方言の形式として *pəpəŋərah* が挙げられている。語頭の *pə* は語基 *pəŋə<ra>h* の語頭を重複したものと見なせ、複数を表すと考えられる。この形式の他に、自由交替形として *pəpəŋəh* が挙げられている。この形式は *pə-pəŋə<ra>h* を起点として、化石後方接中辞の中の子音 *r* とその直前の音節に含まれる子音 *ŋ* が音位転換を起こしたものである。

### 3.5. 変化と方言のまとめ

アタヤル語において「星」を表す形式がいくつも見られるのは、語頭子音の変化（3.1 節）、化石前方接中辞の挿入（3.2 節）、化石接尾辞の付加（3.3 節）、化石後方接中辞と音位転換（3.4 節）といった変化を経たことによる。それぞれの小節において、スコレック方言、ツオレ方言のどちらにおいて、当該変化が生じた形式が見られるかも述べた。それをまとめたのが表 3 である。

表 3 からわかるように、語頭子音の変化という音変化については両方言で生じたが、化石接辞（化石前方接中辞、化石接尾辞、または化石後方接中辞）の付加という、形態的变化は、一例の例外を除き、ツオレ方言において生じた。アタヤル語の「星」に限って言えば、化石接辞の付加はツオレ方言に偏っている。

	スコレック方言	ツオレ方言
語頭子音の変化	✓	✓
化石前方接中辞	✕	✓
化石接尾辞	✓	✓
	(Sqoyaw 集落のみ)	
化石後方接中辞	✕	✓

表 3 アタヤル語方言別の「星」に起きた変化

#### 4. おわりに

アタヤル語群祖語において「星」を表す形式は\*bijəh と再建された。ただし、アタヤル語の諸形式を検討すると様々な変化を経たことがわかる。子音の突発的な変化や前次末音節の脱落といった音変化が見られた一方で、化石接辞の付加が起こっていた。化石接辞としては、化石後方接中辞、化石前方接中辞、化石接尾辞の三種類が見られた。そのうちどれか一つの化石接辞を持つものがほとんどだが、化石前方接中辞と化石後方接中辞の両者を持つものも少数ながらある<sup>24</sup>。セデック語の「星」に起こったのはアタヤル語の形式に挿入されたのと同一起源の化石後方接中辞の挿入のみである。

アタヤル語の「星」に関して、語彙を擬装する変化はツオレ方言のほうが顕著である。ツオレ方言では化石後方接中辞の挿入された形式が見られ、そのすべてにおいて化石後方接中辞<ya>とその直前の音節が音位転換を起こした。また、化石後方接中辞-tux などが付加した形式も見られた。

アタヤル語においては「太陽」「月」といった天体を表す語に化石接辞が付加した。「星」も含めこれらの語をそのままの形で口にするのは禁忌に触れたため、化石接辞を付加して形式を歪めることで、禁忌を回避したのではないかと推察される。

#### 謝 辞

本予稿集原稿に対し、今西一太氏よりコメントをいただいたことに感謝する。ただし本稿の不備は著者の責任である。

#### 文 献

- Blust, Robert (1999) Subgrouping, circularity and extinction: Some issues in Austronesian comparative linguistics. In: Elizabeth Zeitoun and Paul Jen-kuei Li (eds.) *Selected Papers from the Eighth International Conference on Austronesian Linguistics*. Taipei: Institute of Linguistics (Preparatory Office), Academia Sinica.
- Blust, Robert (2013) *The Austronesian languages*. Canberra: Australian National University, Research School of Pacific and Asian Studies.

<sup>24</sup> 表 2 から判断すると、化石接辞の付加は一種類に限られるようである。ただしこの例外となるのが Rianx 集落の二つ目の形式と Cyubus 集落の形式であり、これらでは化石接辞が二重に付加されている。一つは化石前方接中辞でもう一つは化石接尾辞である。

- Blust, Robert and Stephen Trussel (2010) *Austronesian comparative dictionary, Web edition*.  
<http://www.trussel2.com/ACD/> [2023 年 6 月アクセス] .
- 原住民族語言研究發展基金會 (2020) 『族語 E 樂園』 <https://web.klokah.tw/> [2023 年 6 月アクセス] .
- Huang, Lillian M. (1995) *A study of Mayrinax syntax*. Taipei: Crane.
- Huang, Hui-chuan J. (2018) The nature of pretonic weak vowels in Squliq Atayal. *Oceanic Linguistics* 57(2): 265–288.
- Li, Paul Jen-kuei (1981) Reconstruction of Proto-Atayalic phonology. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica*, 52(2): 235–301.
- Li, Paul Jen-kuei (1985) The position of Atayal in the Austronesian family. In: Andrew Pawley and Lois Carrington (eds.) *Austronesian linguistics at the 15<sup>th</sup> Pacific Science Congress*, 257–280, Canberra: Pacific Linguistics.
- 李壬癸 (1996) 『宜蘭縣南島民族與語言』 宜蘭: 宜蘭縣政府.
- Ochiai, Izumi (2018) Historical reduplication in Seediq. *Kyoto University Linguistic Research* 37 23–40.
- Ochiai, Izumi (2019) Atayal: The origin of the tribal name 『國立清華大學世界南島暨原住民族中心電子報』 1: 52–54.
- 落合いずみ (2020a) 「アタヤル語群における『肩』の再建」『アジア・アフリカ言語文化研究』 100: 141–153.
- 落合いずみ (2020b) 「アタヤル語群の「上り」と「下り」の起源」『京都大学言語学研究』 39: 137–148.
- 落合いずみ (2021) 「アタヤル語群における「家」と「屋内」の関連」『島嶼地域科学』 2: 139–162.
- 落合いずみ (2022a) 「セデック語の方言比較から浮き彫りになる化石接中辞」『アイヌ・先住民研究』 2: 1–29.
- 落合いずみ (2022b) 「アタヤル語の「サトウキビ」に起きた特異な形態変化」『北方人文研究』 15: 85–97.
- 落合いずみ (2022c) 「パゼッヘ語とアタヤル語群の「年上キョウダイ」の再建」『北海道方言研究会会報』 98: 27–34.
- 落合いずみ (2022d) 「アタヤル語群における「言う」の再建」 *Evidence-based Linguistics Workshop* 発表論文集: 6–16.
- 落合いずみ (2023) 「アタヤル語群において冷感を表す語の再建」『帯広畜産大学学術研究報告』 43: 184–202.
- Ochiai, Izumi (2023) Reconstruction of “parent” and “grandparent” in Atayalic languages. *Journal of Ainu and Indigenous Studies* 3: 63–82.
- 小川尚義 (1931) 『アタヤル語集』 台北: 台湾総督府.
- 小川尚義・浅井恵倫 (1935) 『原語による台湾高砂族伝説集』 台北: 台北帝国大学言語学研究室.
- Rakaw, Lowsim Jiru Haruq, Yudaw Dangaw, Yuki Lowsing, Tudaw Pisaw and Iyuq Ciyang 編 (2006) 『太魯閣族語簡易字典』 秀林鄉公所.
- 佐山融吉 (1983a) 『蕃族調査報告書：大么族前編』 台北: 南天書局. [初出は 1918 年]
- 佐山融吉 (1983b) 『蕃族調査報告書：大么族後編』 台北: 南天書局. [初出は 1920 年]

月田尚美 (2009)「セデック語（台湾）の文法」東京大学博士論文.

移川子之藏・宮本延人・馬淵東一 (1935)『台湾高砂族系統所属の研究』台北: 台北帝国大学人種学教室.